

スモン検診率向上の取り組み ～看護師による電話での検診調整を継続して～

田中亜由美（国立病院機構大牟田病院看護部）

笹ヶ迫直一（国立病院機構大牟田病院神経内科）

研究要旨

スモン検診率向上を目的として、当院の検診活動において、看護師による電話での検診調整を継続し、今年度新たに、検診受診日の面談を実施した。その結果、検診歴がなかった検診者の獲得により、検診者数の維持につながった。

検診活動において、検診時の医師による身体状況、生活状況や満足度の質問、看護師による電話連絡と面談による経過や困っていることを尋ねることは、対象者や家族の病いの体験の語りを促し、苦悩を和らげることや医療者との関係づくりの一助になっていると考える。

今後、検診案内送付時のアンケートによる状況把握、アンケート返信のあった対象者への電話による検診調整、検診の実施、検診受診日の面談といった多くの段階での関わりによる検診者の確保が検診率向上には必要であると考えます。

A．研究目的

これまで、当院では、平成 27 年度、平成 28 年度のスモン検診活動において、検診率向上を目的として、看護師による電話での検診調整を試みてきた。検診受診が困難な理由として、高齢化、重症化に加え、付き添い、検診場所、体調不良等の問題、かかりつけ医で問題がない、検診の意義の乏しさなどが過去の研究で明らかになっている。このような様々な理由に個別に対応するために、看護師による電話での検診案内、検診場所等の調整に加え、生活状況を尋ね、対象者やその家族の語りを促す取り組みを継続してきた。長期に渡って薬害によるスモンを抱えて生きる患者にとって、検診や電話連絡で自分の身体や生活を病いの体験として語るという医療者との関わりは、検診内容や調整の具体的な理解にとどまらず、苦悩を和らげること、しいては信頼関係の構築、現在の状況やこれからの状況に対応するきっかけとなると考えた。このような意味でこれまでの検診率向上の取り組みが重要であると考え、継続してきた。その結果、受診率の低下なく維持できている。今年度は関係づくりや語る機会づくりを

強化し、対象者にとっての検診の意義の充実を目指して、電話での検診調整に加え、検診受診日当日に看護師による面談を実施した。この取り組みを振り返り、検診率向上の要因を分析し、今後の課題を検討する。

B．研究方法

対象者：平成 28 年 4 月 1 日現在の福岡県筑後地区スモン患者（健康管理手当等支払担当者）15 名

1．検診活動の取り組み（図 1 参照）

1) 検診案内送付の際に、検診希望と検診調整の電話連絡希望の有無を確認するために、当院独自に作成した返信用のアンケート用紙を同封した。

アンケート内容：現在の療養場所と連絡先の確認、検診希望の有無、病院検診と往診の希望、看護師による電話での検診困難な状況や病状・生活状況のお尋ねの可否、検診希望のない方への検診困難な理由

2) 返信後、対象者に対して、看護師による電話での検診調整を実施した。

3) 検診受診者には、受診日当日に看護師が面談を

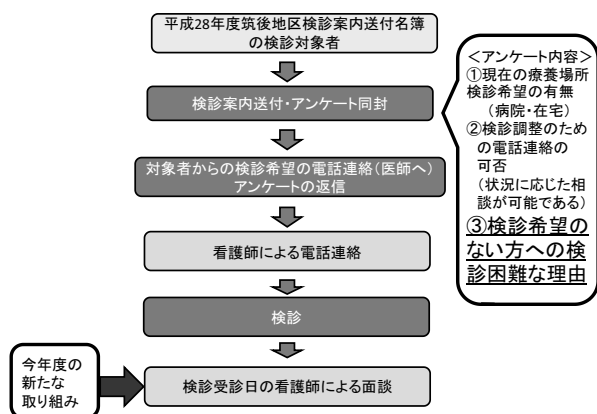


図1 研究方法

実施した。

4) 2) 3) において、対象者の生活状況や困りごとを尋ね、検診の調整を図り対応した。

2. 検診活動の取り組みと対象者の情報から、後方視的に検診率向上の要因を分析した。

（倫理的配慮）

データは研究のみに使用し、個人が特定できないように配慮する。また当院の倫理審査委員会の承認を得た。

C. 研究結果

表1に「検診の取り組みの経緯と検診受診者の年度別比較」、図2に「看護師による電話連絡の結果」を示した。平成27年度から、検診案内送付時のアンケート同封と看護師による電話連絡を開始した。これまで電話連絡方法を工夫しながら、今年度新たに、検診受診日の面談に取り組んだ。その結果、アンケート用紙の返信があったのは7名であった。電話での検診調整の結果、病院での検診が6名、往診が2名となった。昨年度同様の検診者数であった。

アンケート用紙の返信は、検診受診の希望者のみであった。検診受診者のうち1名は、例年通りの電話での検診日調整をされており、アンケートの返信はなかった。

検診者の内訳は、昨年度まで検診歴のあった2名が検診に至らず、検診未経験の2名を検診につなぐことができた。検診未経験の対象者（A氏、B氏）には、前前年度からの電話での検診調整で継続して関わっていた経緯があった。A氏70代男性は他の疾患を患い

表1 検診の取り組みの経緯と検診受診者の年度別比較

	取り組み	当院受診	往診	受診者総数
平成26年度	検診案内送付	6名	1名	7名
平成27年度	検診案内送付後の電話連絡	6名	2名	8名
平成28年度	検診案内送付前後の電話連絡	7名	1名	8名
平成29年度	検診案内送付後の電話連絡 受診日の面談	6名	2名	8名

* 平成27年度～検診案内送付時のアンケート同封。

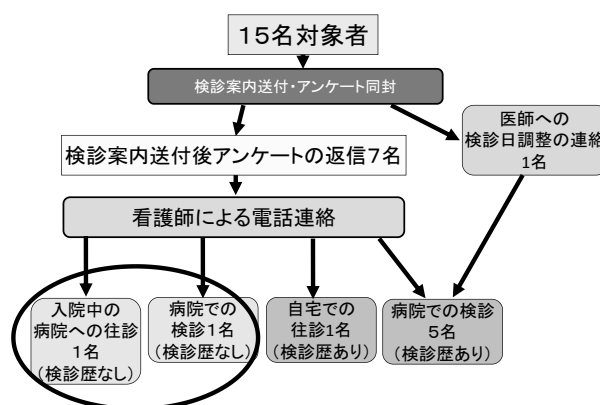


図2 看護師による電話連絡の結果

入院中の病院へ往診した。ADLは全介助であり発語が不明瞭なことがある。妻の話では、A氏からスモンについて話すことはなかったが、前年度から妻との電話調整において検診の意義や具体的な方法について伝えてもらい、今年度A氏の了解が得られた。妻の協力を得て、これまでの経過を尋ねながら医師の検診が実施された。B氏80代女性については、前前年度から夫との電話での調整を図っていた。高齢の夫婦のみの世帯であり、自宅周辺での医療や社会資源を活用しており、当院が遠方にあることから、検診につながっていなかったが、体力の低下や気になる身体症状があり、治療方法等の対応を希望され、今年度は病院での検診につながった。検診後に検査を行い医師が適切な診療科を紹介した。

看護師による電話連絡と受診時の面談において、対象者と家族から、スモンを患った経過やスモンとともに生きた経過を語られたり、ここ1年の対象者の生活状況や体調、その対応を語られた。対象者の困りごとに対して、身体症状に対して医師へつなぎ検査の実施、

適切な診療科の紹介、生活状況に対しては社会資源の活用状況を確認し情報提供を行った。

今回、検診歴があるにも関わらず検診に至らなかった対象者2名は、1名は患者会を脱退したことがわかり、他1名は返信もなく連絡がとれなかった。

D. 考察

今回、検診案内に同封したアンケートにおいて、対象者の連絡先等の把握に加え、新たに受診困難な理由の把握を試みたが、検診受診の希望がない対象者からの返信がなく、理由の把握はできなかった。

この3年間に渡って、看護師による電話での検診調整において、往診での検診希望者の受診継続、新たな受診者の確保につながっている。案内送付だけでなく、電話による検診の案内や、生活状況等を尋ね医師と協働して対応することで、特に検診歴のない対象者には検診内容の理解や社会資源等の情報提供の機会となっている。また継続した取り組みによる安心感が得られ受診につながっていると考える。検診活動において、検診時の医師による身体状況、生活状況や満足度の質問、電話連絡と面談による経過や困っていることを尋ねることは、対象者や家族の病いの体験の語りを促し、病気を理解している医療者に語ること、これまでの苦勞を振り返り語り合うことは、対象者と家族の苦悩を和らげ、医療者との関係づくりの一助になっていると考える。

受診時の面談は今年度からの取り組みであり、効果的な面談内容の検討や方法の工夫を図り、今後の検診への影響を分析していく必要がある。

検診率向上のための取り組みにおいて、検診案内送付時のアンケートによる状況把握、アンケート返信のあった対象者への電話による検診調整、検診の実施、検診受診日の面談といった多くの段階での関わりによる検診者の確保が検診率向上には必要であると考え。今後も、対象者の高齢化により、体調の変化や検診場所までの交通手段の確保困難の問題はあるため、案内や連絡による状況把握と、顔が見える関係の継続、往診などの検診場所の対応が必要であると考え。また、検診対象者が減少している中で、検診案内に返信がなく連絡先不明な対象者がおり、その対象者の状況の把

握も課題である。さらに、検診歴があった対象者の未受診の理由を理解し対応することも、検診率向上の取り組みにおいて重要であり、今後の課題である。

E. 結論

看護師の電話による検診調整は、検診対象者のスマートフォン検診受診に貢献できている。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献